

委員 市川 紗椰



初めて選定企画委員として参加させていただきましたが、噂どおり、独創性に富んだ企画の数々に高揚感を覚えました。異なる要素を掛け合わせることで新規性を生み出すタイプの作品が多いのではないかと想像していましたが、実際には一つのテーマや問いを徹底的に掘り下げ、専門的かつマニアックな視点から構築された企画が多かったような印象です。表現の手法や問題意識の振れ幅も大きく、現代の表現が持つ可能性の広さを改めて実感する機会となりました。

「一息ごとに一時間、あかいくつをさがして」。

「あかいくつ」、ハマのメリーさん、根岸外国人墓地といった、横浜という都市に半ば風化しながら残り続けてきた歴史の断片で作るモノオペラ。輪郭が曖昧ながら知名度がある素材にどんな「新たな視点」を出すのか、様々な可能性を感じます。

「現代音楽＝難解」という固定観念を、土地の記憶と人の声によって内側から更新してくれることに期待してます。「かつて奪われ、押し殺されてきた声」が主役なので、いかにフィールドワークで埋もれてきた歴史の断片が拾えるのか、気になります。

企画者と同世代なので、いっそう注目です。

「10 万年前のコントラバス/10 万年後のコントラバス」は、タイトルを見ただけの段階から気になってしかたがなかったです。近藤さんたった一人で作る、壮大かつ親密な世界。コントラバスに取り憑かれたかのような感じに惹かれます。

10 万年前と 10 万年後という途方もない時間軸を持ち込みながら、その中心に極めて身体的で物質的な楽器・コントラバスを据えている面白さ。抽象的な時間論や未来論を説明として聞くのではなく、「木を削る」「分解されたパーツを組み替える」「音が鳴る／鳴らない」という具体的な行為を通して、「音とは何か」「楽器とは誰のものか」「人間はどこまで音を支配できるのか」といった根源的な問いに挑んでほしいです。理屈ではなく現場の出来事として突きつけてくることに期待しています。

完成した楽器が「正しい音」を出すかどうかではなく、「音が立ち上がってしまう瞬間」そのものに立ち会えることを楽しみにしてます。